

天を測る

今野敏 著

江戸時代末期から明治時代にかけての日本の数学者・海軍軍人・財務官僚であった小野友五郎おのともごろうの活躍を描いた歴史小説。

1860年に、日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節派遣が決定されたが、その護衛として派遣されることになった咸臨丸（艦長勝麟太郎）を補佐する測量方兼運用方（航海長）となって、アメリカへ航海する。

助言役として同乗した米国海軍の測量士官ジョン・M・ブルック大尉は精密なクロノメーターによって緯度を測定していたが、小野は月距法（恒星と月の角距離を測ることによって、正確な時刻を割り出し、経度を知る方法）で測定していた。小野は「動かすべきは手ではなく頭です。測量方が計算を間違えれば船は路頭に迷う。算術は決して自分を裏切らない」という信念で行動した。

アメリカと日本とで測量値が異なった際に小野は、「正しい計算をすれば、だれがやっても答えは同じ。どうして人は、細かなことに拘泥したり、ことさら複雑に考えようとするのか。物事はできるだけ単純化して考えたほうがよい。世の中の真理というのは、ごく単純なものだ。」と言い、実際、日本側の測量値が正しく、その信念と技術の正確さにブルック大尉は感心した。身につけた知識と技術は、どんな場面でも、信念を持って行動することで、活かされるということが証明された。

アメリカ滞在中には造船所を見学し、それまで蒸気機関の軍艦を海外から購入するしかなかった日本でも、蒸気軍艦を造船し、そのことにより人材の育成もできるという夢を持った。しかし、このとき同船していた福沢諭吉が「日本は遅れている。アメリカやヨーロッパの文化

が進んでいるから、全て西洋に学ばなければならない。」と語ったところ、小野は、「おしなべてこの世は足し算です。異国の文化が面白ければ、それを取り入れればいい。そのときに、日本古来の文化を切り捨てる必要はない。」と反論し、異国の文化に目を奪われることなく、自国の文化を誇りに思うことから、夢の実現に向けて様々な調査を行った。

日本に帰国後、蒸気軍艦建造を提案し、「世の中の基本は足し算だと思います。一気に大きな物を造ろうとしても無理です。小さな部品を足し上げていけば、結果的に大きな船になるのです。理屈どおりならないものなどありません。もし、うまくいかないことがあったら、どこかで理屈が間違っているのです。」という信念を貫き、1866年に国産蒸気軍艦千代田形が建造された。

日本は開国はしたが、薩摩藩や長州藩の過激な攘夷行動があり、小野は江戸湾の総合的な海防計画や毛利家征伐のための動員計画の責任者となった。その際も小野は、「世の中は足し算だと思っております。足りないものを補っていくことで、強くも大きくもなれます。しかし、毛利や島津は引き算ばかり考えている。彼らが天下を取れば、日本はきっとゆとりも品格もない粗末な国になっていくでしょう。己にないものを自覚し、他者のよさを認めて足し算をしていく。品格というものは、そうして育っていく。」とその後も日本のために働いたが、大政奉還後、鳥羽・伏見の戦いの経緯から禁固の刑を受けた。

その後保釈され、鉄道敷設の測量に従事した。「日本のために働く。それは今も昔も変わりません。ただ、この国をよくするために力を尽くすだけです。水平線と星がある限り、私は迷うことはない。」彼の信念と行動には感銘を受けました。

（講談社、332頁、定価1,870円（税込））（片受健一）